

美馬市美馬町の民間信仰

民俗班 (徳島民俗学会)

橘 禎男*

要旨：民間信仰は、庶民の現世利益的欲求に基づいた暮らしの中の信仰行為で、仏教や神道など宗教との関連は深い。今年度は、美馬市美馬町の庚申塔とお堂（庵）を中心として、地元の要望が強かった旧郡里山村の民間信仰を重点的に調査した。その結果、美馬町の街道沿いには、各集落に1～2基の庚申塔が道しるべのように立っており、庚申信仰が残っていることがわかった。また、集落には、集会所を兼ねたお堂（庵）が必ずあり、大師講や観音講などの信仰行事が、住民の手で現在も受け継がれていることがわかった。

キーワード：街道、庚申塔、お堂（庵）、観音講、大師講

1. はじめに

美馬町は、昭和32年（1957）郡里町と重清村が合併して成立した。明治22年（1889）に郡里村と合併した旧郡里山村は、阿讃山地南面の野村谷川と鍋倉谷川の間位置し、南を県道鳴門池田線が通り、野村谷川沿いの県道美馬塩江線は北進して、相栗峠で高松市塩江に入る。鍋倉谷川に沿った国道438号は三頭トンネルで仲多度郡まんのう町に通ずる¹⁾。

ところで、庚申信仰とは、六十日に一回巡ってくる庚申かのえさるの日に徹夜して語り合い、健康長寿や五穀豊作を祈願する信仰行事のことで、講を組んで行うのが普通であった。もし、この夜眠っていると、人間の体内さんしにいる虫が体内から抜け出して、その人の罪過を天帝に告げるため寿命が縮まるとされた。庚申信仰は奈良時代に中国から伝えられ、初めは貴族が中心の遊びであったが、江戸時代になると庶民化して広く民間でも行われるようになった。庚申塔はその記念に立てられたもので、初期は文字塔が主であったが、江戸中期から青面金剛像が現れ

て、庶民の多様な祈願の対象となった。

今回の調査は、美馬町の庚申塔とお堂（庵を含む。以下同じ）を中心とした民間信仰を明らかにする目的で、同時に暮らしの中で重要な役割を果たしてきた峠や街道についても調べた。調査は、平成20年8月1日から、21年1月19日までの中の24日間である。

2. 美馬町の峠と街道

1) 美馬町の峠道と石造物

美馬町の峠とお堂の所在地を（図1）に示した。主な峠は、次の3カ所である。

①相栗峠 580m

藩政期の絵図に「郡里越」と記されている相栗峠は、美馬と讃岐を結ぶ重要な街道で、寛政5年讃岐から祖谷へ旅をした菊池武矩の「祖谷紀行」にも登場する²⁾。芝坂から峠に至る街道には庚申塔が5基残っており、特に、丈寄にある寛延2年（1749）の庚申塔は笠と宝珠の下に紋様の入った立派なもので、旅人はよくここで休憩をとったという。

* 徳島市国府町日開42-5

	峠(◆)	標高
A	相栗峠	580m
B	寒風越	890
C	三頭越	790
D	二双越	860

番号	お堂(●)	所在地
1	大師庵	丈寄
2	大師庵	清田
3	観音庵	入倉
4	大師庵	入倉
5	大師庵	正部
6	有明庵	大久保
7	薬師堂	切久保
8	大師庵	立見山
9	大師庵	芝坂
10	大師庵	池ノ浦
11	阿弥陀庵	滝ノ宮
12	観音庵	中宗重
13	大師庵	東宗重
14	銀香庵	中山路
15	大師庵	小長谷
16	観音庵	天神
17	大師庵	中東原
18	大師庵	北東原
19	庚申堂	谷ヨリ西
20	西地庵	西荒川
21	端ノ庵	東荒川
22	大師堂	荒川
23	大師堂	露口
24	西大師堂	露口
25	中西庵	中西
26	観音堂	滝下
27	枯木庵	八幡
28	大師庵	宮北
29	大師堂	宗ノ分
30	薬師庵	竹ノ内
31	阿弥陀庵	西村
32	大師堂	猿坂
33	大師堂	観音
34	薬師庵	西浦
35	大師庵	芹佐古
36	大師堂	中村
37	大師堂	惣田
38	大師堂	藤宇
39	大師堂	山西屋敷
40	大師堂	中野

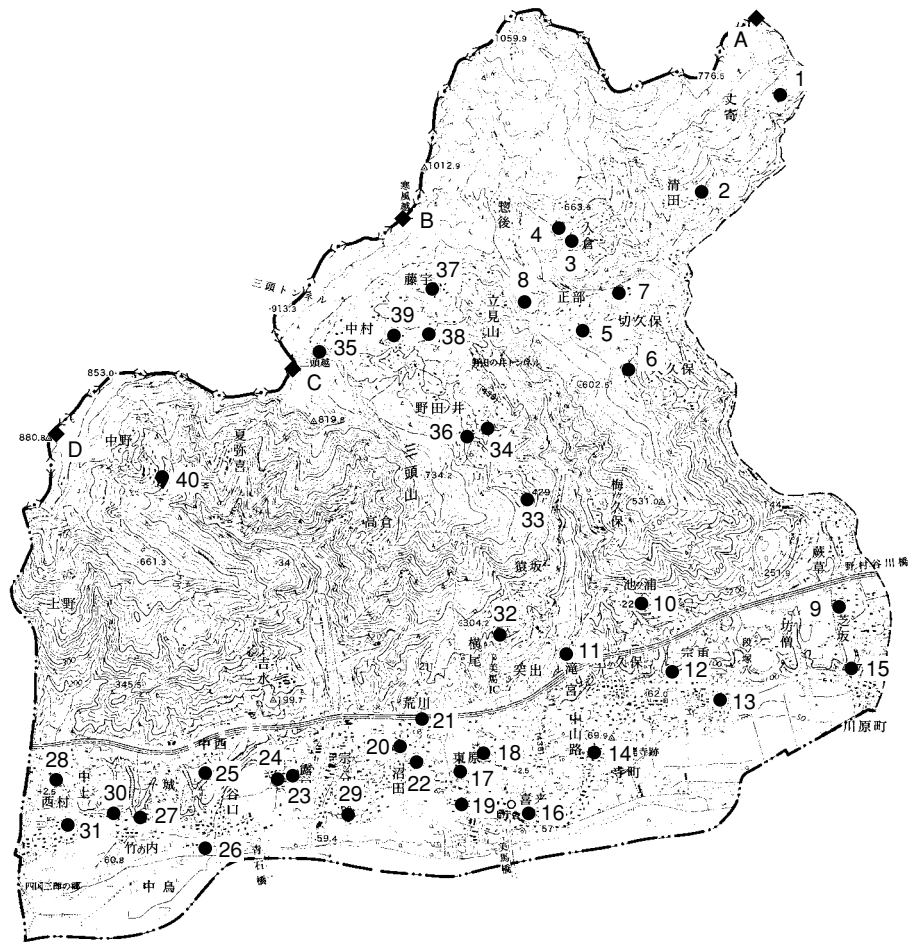


図1 美馬市美馬町の峠とお堂所在地

②三頭越 790m (写真1)



写真1 立見山の鳥居と三頭越

三頭トンネルの上に位置する三頭越は、藩政期か

ら昭和30年頃まで讃岐へ米稼ぎに行く借耕牛が通った道としてよく知られている。また、峠に立つ「大門まで七里半」の道標が示すように金比羅街道として知られ、安政4年(1857)建立の両神鳥居の横に、道祖神として猿田彦命と天鈿女命あめのうずめのみことの石像が向き合って立つ。夕日が射す秋の景観は見事で、数ある県下の峠の中でも最も昔の雰囲気を残している峠である。

郡里山の有明庵から峠に至る街道には、親鸞ゆかりの二十四輩があり、峠を見通せる立見山には峠と同様の鳥居が残っている。また、庚申塔と道標も各2基あり、歴史と自然を楽しみながら歩く里山ハイキングコースとして最適である。

③二双越 (立石峠) 860m

讃岐で立石峠といわれる二双越は、町内西部からモグラやカイコの神様として知られる二双神社の参拝者や、借耕牛の道としてよく利用された。露口から峠に至る道には、庚申塔が3基あり、峠には嘉永6年(1853)建立の地藏菩薩と馬頭観音像が立つ。左の子持地藏の台座には、「岡部甚四良長重 西岡礎磨蔵」の名があるが、岡部姓は讃岐側に、西岡姓は中腹の中野にあり、藩政期には山林奉行をしてい

たとわれ、2体の石仏は両藩の争いがないように願って立てられたという伝承がある。

2) 撫養街道

美馬町内を通る撫養街道沿いには、神社やお堂とともに石造物が多く存在するが、庚申塔は旧郡里山村に5基、旧郡里村に3基、旧重清村に4基ある。特に滝ノ宮には、江戸中期の青面金剛像3基を含めて5基並んでいるのは圧巻であるが、風化のため損傷しているのは惜しまれる。

表1 美馬市美馬町の庚申塔一覧

番号	所在地	種類					様式	製作年代
		文字塔			刻像塔			
		庚申待	青面金剛	猿田彦	青面金剛	猿田彦		
01	美馬町丈寄				6-3-2		笠付	寛延2(1749)8月
02	〃 清田下				6-3-2		〃	寛保1(1741)6月
03	〃 入倉上久保				4-3-2		〃	延享2(1745)9月
04	〃 〃				4-3-0		自然	大正7(1918)5月
05	〃 正部				6-3-2		笠付	延享2(1745)6月
06	〃 惣後					○	自然	なし
07	〃 立見山				6-3-2		笠付	天明8(1788)9月
08	〃 梅ヶ久保				6-3-2		〃	寛延4(1751)8月
09	〃 西ノ浦				6-3-2		〃	寛延4(1751)8月
10	〃 蕨草				6-3-2		自然	慶応1(1865)12月
11	〃 岡				6-3-2		笠付	寛保3(1743)10月
12	〃 ノツゴ				4-3-2		自然	明治10(1877)4月
13	〃 滝ノ宮	梵字					剣形	年紀欠損 12月
14	〃 〃				6-3-2		笠付	寛延4(1751)6月
15	〃 〃				4-3-2		〃	元禄14(1701)12月
16	〃 〃	不明					剣形	不明
17	〃 〃				4-2-2		〃	元□□□()9月
18	〃 小長谷	○					笠付	延宝2(1674)3月
19	〃 東宗重				4-3-2		〃	正徳4(1714)3月
20	〃 〃				6-3-0		自然	明治23(1890)4月
21	〃 中山路				4-3-2		笠付	□□6()5月
22	〃 願勝寺				4-3-2		〃	元禄13(1800)10月
23	〃 天神北				6-3-0		笠付	安永4(1775)11月
24	〃 谷ヨリ西				4-2-2		〃	元禄5(1692)7月
25	〃 北東原	○					剣形	元禄3(1690)6月
26	〃 南東原				4-3-2		剣形	なし
27	〃 宗ノ分				6-3-0		笠付	明和4(1767)9月
28	〃 滝ノ下				6-3-2		〃	寛延3(1750)9月
29	〃 竹ノ内				6-3-2		〃	宝永5(1708)10月
30	〃 東荒川	○					〃	寛文12(1672)10月
31	〃 荒川				4-2-2		〃	宝永4(1707)9月
32	〃 城				6-3-0		〃	明治29(1896)11月
33	〃 八幡			○			自然	明治16(1833)10月
34	〃 宮前				4-2-2		笠付	元禄10(1697)8月
35	〃 吉水				4-3-2		〃	宝永2(1705)8月
36	〃 露口				4-3-2		〃	元禄16(1703)1月
37	〃 中野				6-3-2		〃	寛保3(1743)10月
38	〃 猿坂				6-3-2		〃	寛延4(1751)6月
39	〃 中村				6-3-2		〃	寛保3(1743)9月
40	〃 中村				4-2-2		〃	享保18(1733)11月
	合計	3(5)	0	1	33	1		

刻像塔の青面金剛の6-3-2は、左は手の数、中は猿、右は鶏の数を表す。

なお、藩政期の吉野川分間図では、撫養街道は郡里村で山手コースと吉野川沿いのコースに分かれているが、吉野川沿いのコースは旧喜来の渡し場付近まで石造物はない。東宗重の玉振神社と中山路の八幡神社に合わせて3体の青面金剛像があるが、これらは大正初期の耕地整理の際に移転したものではないかと考えられる³⁾。

3. 美馬町の庚申塔と庚申信仰

1) 美馬町の庚申塔一覧

美馬町の庚申塔については、『美馬町史』に分布表が出ているが⁴⁾、校区による場所と年紀で区分しているため、個々の庚申塔の特定には利用できなかった。そこで、地元民の案内で調査した結果を(表1)に示した。総数は40基で町史の記載より少なかったが、全体の特徴は把握できると思う。

2) 庚申塔三例

①小長谷の文字塔(写真2)



写真2 小長谷の文字塔

相栗峠への起点になる小長谷の大師堂前に立つ文字塔で、延宝2年(1674)の建立である。高さ2.19mの塔の正面には、「奉寄進庚申待一座三年諸願成辯安楽祈所也」の文字が刻まれ、その上部に青面金剛を表す種子がある。庚申の日は六十日に一度巡ってくるので、一年で六回、三年で十八回になる。「一座三年」とあるのは、十八回終えたことを表し、その記念に石塔を立てたことが読みとれる。

②露口の青面金剛像(写真3)



写真3 露口の青面金剛像

二双越へ通じる街道の杉の下に立つ2mを超える石塔で、模様が付いた唐破風の笠の上に「花」の字が刻まれ、宝珠は蓮弁で包まれている。青面金剛像が多く作られ始めた元禄期のもので、チップ工場の木粉で白くなっているが損傷はなく、浮き彫りの青面金剛像や猿、鶏も鮮明である。なお、笠に吊したくくり猿から、参拝者の信仰の跡がうかがえる。

③東宗重の青面金剛像(写真4)



写真4 東宗重の青面金剛像

吉野川コースの撫養街道沿いにあったと推定される庚申塔で、現在は玉振神社の境内に地藏尊などの

石仏とともに保存されている。自然石に肉厚に陽刻した青面金剛像は、怒髪、忿怒相^{ふんぬ}で、手には宝剣・三叉鉾・弓矢・輪宝・ショウケラを持ち、火焰光背もある。上部には瑞雲と日月も鮮やかに描かれてい

る。明治23年（1890）の建立で、四人の世話人の他に「石工武田藤三郎」の名もある。

3) 美馬町の庚申塔の特徴

他町村と比べた美馬町の庚申塔の特徴は、

表2 美馬市美馬町のお堂（庵）と仏像一覧

番号	お堂（庵）の名称	所在地	仏 像（お 堂 内）								お堂外（石仏）	集会所の標示	
			阿弥陀如来	弘法大師	地藏菩薩	薬師如来	観音菩薩	不動明王	釈迦如来	その他			
1	大師庵	丈寄	●	□								地神塔	
2	大師庵	清田		■								地神塔	
3	観音庵	入倉		□				● 2					
4	大師庵	入倉		■									
5	大師庵	正部		■								庚申塔地神塔	
6	有明庵	大久保	●	○ 2								二十四輩名号塔	
7	薬師堂	切久保				●							
8	大師庵	立見山		■ 2									○
9	大師庵	芝坂		■									
10	大師庵	池ノ浦		●									
11	阿弥陀庵	滝ノ宮	●									地藏尊	
12	観音庵	中宗重		○				●				馬頭観音	
13	大師庵	東宗重	○	■				○				光明真言塔	
14	銀杏庵	中山路									虚空蔵菩薩		
15	大師庵	小長谷		●				□				庚申塔光明真言塔馬頭観音	
16	観音庵	天神						●					○
17	大師庵	中東原	●	□									○
18	大師庵	北東原		■	□	□	□				庚申塔		○
19	庚申堂	谷ヨリ西									庚申塔		
20	西地庵	西荒川	●										
21	端ノ庵	東荒川	●	○					○			庚申塔地神塔	
22	大師堂	荒川		■ 2				○				弥勒菩薩	
23	大師堂	露口	●	□									○
24	西大師堂	露口		■									
25	中西庵	中西	○	○		○	○						○
26	観音堂	滝下(中島)		■				○				庚申塔地藏尊光明真言塔	○
27	枯木庵	八幡			■							光明真言塔	
28	大師庵	宮北	○	■					○				○
29	大師堂	宗ノ分		●				□				地藏尊庚申塔	
30	薬師庵	竹ノ内		○			●						
31	阿弥陀庵	西村	●										
32	大師堂	猿坂		●				□	○				
33	大師堂	観音		●				○	○				
34	薬師庵	西浦	●掛軸	○			○	○					○
35	大師庵	芹佐古		■									○
36	大師堂	中村		■									
37	大師堂	惣田		●				□				地藏尊	
38	大師堂	藤宇	●	□									○
39	大師堂	山西屋敷		●									
40	大師堂	中野		■									
合計 40 (内訳)	大師堂24 観音堂4 薬師堂3 阿弥陀堂2 庚申堂1 その他6		13	35	2	5	14	4	2	庚申塔2 虚空蔵菩薩1	庚申塔5 地藏尊5 光明真言塔4 地神塔4 馬頭観音2 二十四輩1 名号塔1 弥勒菩薩1	11	

(注) ●○：木像 ■□：石像 (●■は本尊)

①種類として青面金剛像が全体の82.5%を占めており、昨年度調査の美馬市木屋平の庚申塔一覧表より計算した64%に比べて多い⁵⁾。

②様式としては、笠付きが72.5%（木屋平は31%）で、造形的に美しく大きく見える。これは山地とはいえ、平坦部が多く庚申塔の用地が確保しやすかったのと、煙草の生産による地域の経済力も関係していると考えられる。

③造塔は、寛文期に始まり元禄期から青面金剛像が増えた。これは木屋平の調査報告とよく似た傾向を示している⁶⁾。

4) 美馬町の庚申信仰

「はじめに」の項で述べた内容の庚申信仰が、民間信仰として江戸時代は盛んであったことが、澄禅の『四国遍路日記』からうかがえる⁷⁾。しかし、現在の庚申講は徹夜などはせず、日開谷川流域の阿波町大道南の庚申堂で見られるように、午前中に十数人が集まってお経を唱えた後、菓子をつまみながら談話することで終わっている。

美馬町にも庚申堂があるが、まつりの伝承はない。しかし、昔は参拝者が多かったことが、耳の遠い人が治るようと持参した穴あき石が多数残っていることから推察できる。

旧郡里山村にある17基の庚申塔（表1の1～17）を正月に巡ってみると、11基に松やウラジロ、ミカンなどが祀られていた。また、滝ノ下の庚申塔では、青面金剛像に手を触れながら、真剣に祈願している高齢者に出会った。このことから、庶民の現世利益をかなえてくれる石仏として、庚申信仰は今も生きることがわかった。

4. 美馬町のお堂と仏像

1) 美馬町のお堂一覧

美馬町の民間信仰を考える上で重要なのは仏教信仰で、町内には真言宗の願勝寺と真宗の安楽寺、西教寺、常念寺、林照寺の5カ寺があり、年間を通して各種の法会が行われている。しかし、本稿では、それらとは別に集落のお堂を中心に行われている、民間の信仰行事を報告するに止めた。

美馬町のお堂と祀られている仏像一覧を示したのが（表2）で、町史には45の堂が記されているが、

廃堂になったものもあり、今回40カ所が確認できた。なお、中山路の銀杏庵は、現在建物は無いが再建計画が進行中とのことで表に入れた。

2) 美馬町のお堂と仏像の特徴

①お堂の名称は、大師堂が24で全体の半数以上を占め、次いで観音堂4、薬師堂が3であった。

②大師像は35体あり、全体の78%を占める32のお堂に祀られていた。観世音菩薩は14体、阿弥陀如来は13体であった。

③大師像と阿弥陀如来を並べて祀るお堂が10カ所あり、その内本尊は阿弥陀如来であるが、大師堂と呼ばれているお堂が4カ所あった。

④近年、お堂が改築されると、多くが地域の集会所として管理されるようになり、信仰の場としての機能が薄れつつあるように見受けられた。その中であって、竹ノ内の薬師庵は、出入りがしやすく、月に5回も集まって信仰や集会に利用している事例は貴重である。

以上より、美馬町では、大師信仰が民間信仰の基層に深く浸透していることがわかった。一方、宗派から見た家の信仰は、『美馬町史』によると、美馬町では仏教徒が町民の80.9%を占めており、仏教徒に占める真宗の割合は60.4%で、真言宗は27.2%と少ないことがわかる。特に、郡里町においては、仏教徒に占める真宗の割合は70%という⁸⁾。19年度調査の美馬市木屋平では、大師像と阿弥陀如来を祀ったお堂が6カ所あったが、堂の名称はすべて「阿弥陀堂」であった⁹⁾。本町では、二つの仏像を祀った4カ所のお堂（表2の1, 17, 23, 38）が、「大師堂」となっているのはなぜだろうか。

町内のどの集落にも見られるお堂は、庶民の信仰や娯楽、集会の場として近世以降に建てられたものといわれるが、湯川洋司氏が『日本の民俗』の中で指摘しているように、「堂は、暮らしのなかに生きるとても身近で切実な施設であった」といえる¹⁰⁾。

仏像や堂名については寺の指導もあったと考えられるが、住民の意向は当然あったものと考えられる。庶民レベルでみると、大師信仰がすでに存在したところに阿弥陀信仰が入ってきたと考えられるので、真宗門徒が多いにも関わらず、お堂を中心とした地域の信仰では、美馬町では特に「大師」の名号を尊

重したものと推察される。

5. 旧郡里山村の民間信仰

1) 観音講

美馬町入倉上久保の観音堂は、2間四方のトタン葺きの建物で、堂内には木像の観音菩薩2体と、石像の大師像が祀られている。毎月17日、ここで開かれる観音講(写真5)は、集まった集落の人々が正信偈を唱え御文章を読誦してから、持ち寄っただんごや芋の天ぷらなどを食べながら、談笑して半日を過ごす。当屋は月交代で、祭壇の花や供え物を準備し、だんごも作ってくる。昨年11月17日、案内を受け参加したが、10年前に塗り直したという金色に輝く観音像の前で、地元の女性たち6人と過ごしたひとときは、住民の篤い信仰心と受け継がれてきた伝統行事の重さを充分感じさせてくれた。



写真5 入倉の観音講

2) 大師講

入倉上久保の集落には、観音堂よりやや広いが構造がよく似た大師堂がある。仏像は石仏の大師像のみで、毎月旧20日に大師講をしている。上久保集落は現在18戸で、家の宗派はすべて真宗であるが、大師講には12、3人集まることもあるという。お経は般若心経を唱えて、その後だんごなど食べながら談笑するのは、観音講の場合と同じである。上久保のように集落に二つのお堂を持ち、住民の手で二通りの信仰行事を守っている例は町内でも珍しい

3) 美馬町の信仰風土

千葉乗隆氏は、『地域社会と真宗』の中で、真言宗信徒の信仰の現世祈禱的なマジカルな面を指摘し、「このようなマジカルな現実的宗教信仰は、真

宗門徒の多い山地よりも真言宗混在の平坦地に多い」と述べて、「この村の庚申塔の分布状態が山地带一基、平坦地十六基ということによっても、その一端を窺うことができる」としている¹¹⁾。

宗派の混在と庚申塔の分布に関連性を見出そうとするこの記述は、本町の民間信仰を考える上で示唆に富むが、引用した『郡里町史』の庚申塔数が16基と少ない上に、「山分」の範囲が旧郡里山分と必ずしも一致していないと思われる¹²⁾。今回の調査結果から見ると、旧郡里山分が17基(表1の1~17)で、平坦地分6基(同18~23)より多いことから、宗派の分布と庚申塔との関連性については、今後の課題として検討を続けたい。

ところで、阿満利麿氏は『仏教と日本人』の中で、「明治政府は神仏分離を強行したが、民衆レベルでは“神さま仏さま”という意識は生き続けて今にいたっている」と述べているが¹³⁾、今回の調査でもそのような場面をいくつも見る事ができた。

惣後の集落の上にある森に、木の鳥居と狛犬が立つ十二社神社がある。地元では「こくぞうさん」と言って、正月には餅を供え御幣を立てる。この神社は、大正4年(1915)正部神社に合祀されたが、今も「十二社神社」と呼ばれており、建物内には他のお堂で見られるものとは違う、一木造りの荒削りの仏像が7体祀られている。

郡里山や野田ノ井で民家を訪ねると、床の間に「天照皇大神」の掛軸を掲げ、一角には神棚がある。そして仏壇前では毎朝「南無阿弥陀仏」を唱えるが、隣には大師像を祀って、毎月20日には手を合わせる。また、地域の大師講では、般若心経を唱えて住民となごやかに過ごす。これらは、日本人の宗教意識の中に存在する神仏混淆(こんこう)を実証するものであるとともに、仏教宗派の信仰作法を広く受け入れてきた町民の信仰風土も表している。

6. おわりに

美馬町の風景がよく見える場所は、貞光の道の駅と県境に近い広域農道である。よく利用された山地と風光明媚な自然、伝統ある寺院やお堂、歴史のある峠と石仏、それらが織りなす文化的景観とそこに暮らす人々。調査をしながら、魅力ある里山のこと

をいつも考えていた。しかし、山間地では過疎と高齢化が進行している現実があった。各方面から町の将来像をどう描いていくかは、今後の大きな課題であろう。

今回の調査では、町内の多くの方々にご協力をいただき、無事調査を終えることが出来た。特に、地元の藤島邦照、逢坂俊男両氏には、終始親切なご教示をいただいた。地元の皆様に心からお礼を申し上げ結びとしたい。

文献

- 1) 角川日本地名大辞典 徳島県, (1986) p947.
- 2) 東祖谷山村誌, 東祖谷山村 (1986) p896.
- 3) 徳島県歴史の道調査報告書 第3集 徳島県教育委員会 (2000) p31, 32.
- 4) 美馬町史, 美馬町 (1989) p1253, 1254.
- 5) 6) 9) 阿波学会紀要, 第54号 阿波学会 (2008) p189, 192, 193.
- 7) 四国遍路記集, 伊予史談会 (1997) p24.
- 8) 12) 郡里町史, 郡里町史編集委員会 (1957) p348, 595.
- 10) 日本の民俗6 村の暮らし, 吉川弘文堂 (2008) p133.
- 11) 地域社会と真宗, 千葉乗隆 (2001) p432, 433.
- 13) 仏教と日本人, 阿満利磨 (2007) p156, 157.